

## 庭からの旅

### 庭への旅

茶と庭 ——アフタヌーンティー前夜

#### 午後の茶

イギリスと茶の関わりについて考えてみると、まず思い浮かぶのはアフタヌーン・ティーでしょうか。この習慣は日本でもますます知られるようになってきており、国内のホテルや喫茶店でも、楽しめるところが多くなってきています。テレビや雑誌で報道されるイギリス人の生活のひとこコマを見ても、ティーカップを手にして談笑する家族の姿が、英国生活の象徴としてよく使われています。

この習慣が始まったのは十九世紀の半ばで、七代目ベッドフォード公爵夫人アンナが、彼女を訪ねてきた友人にふるまったアフタヌーンティーが、その友人たちを介して上流社会に広まり、やがて市民の家庭にも広がっていったといわれています。その頃のイギリスの食生活は、朝食をしっかりと、昼食は軽く、また晚餐は人を招いての社交的な食事であったために夜の八時近くというパターンが多く、ちょうど夕方時間に、空腹を満たすための軽い食事を兼ねた茶の会を催すことになったというわけです。アフタヌーンティーがまた、ファイブ・オ'clock・ティー（午後五時の茶）とも呼ばれるわけや、それが女性にとっての憧れの的であることも、そんなところに起源があるからなのです。ホテルで正式なアフタヌーンティーを注文すると、マフィンにケーキ、それにサンドウィッチ、多いときには肉料理までついてくることがあって、「おやつ」と茶という感覚と相容れないことがあります。消化の悪い肉を遅い夕食で食べないかわりに、アフタヌーンティーでそれを摂っておき、夕食は軽くすませる、という習慣もあったようで、特にイギリス人と我々とお腹の容量が違うわけではありません。

このように有名になったアフタヌーンティーの習慣ですが、これは家の中で楽しむ習慣であって、イギリス人のもうひとつの楽しみである庭との関わりを考えようとすると、どうしてもつながりが感じられません。それを考えるには、どうももう少し時間を遡って、中国生まれの茶という嗜好品が、どのようにしてイギリスで飲まれるようになったのか、その経緯をみる必要があります。

#### プラントハンター

茶が初めてイギリスに知られるようになったのは十七世紀、当時東洋の島々との貿易を独占していたオランダを通じてでした。それは中国人が薬として飲む、ある薬草を煮出した飲み物らしい、ということでは知られておらず、そのもとである植物としての茶については、謎にまつまられたままでした。そのため、初期の茶は非常に高価で、宮廷での宴会や、皇族や高官への贈り物として使われただけでした。その後、中東との貿易によってもたらされたコーヒーやチョコレート（当時は飲み物だった）が、市民の情報交換の場として生まれたコーヒー・ハウスによって普及するようになると、やがてそこで茶も扱われるようになり、オランダからさかんに輸入されるようになりました。しかし、イギリスが「紅茶の国」になったのは、十七世紀も末、オランダを通さず中国から直接茶を輸入するようになってからで、当時中国貿易の窓口だったアモイの茶がすべて福建省の武夷産のポーヒーとよばれる紅茶であったために、茶といえば紅茶をさすという通念がつけられることになったようです。詳しいことはわかりませんが、イギリス人の紅茶に対

する嗜好や風習の原形が、この頃の中国茶の飲み方を反映したものであることは確かなようです。

十八世紀になると、茶はコーヒーハウスから家庭へと徐々に浸透していき、イギリス国民の必需品としての地歩を築いていきます。中国からの輸入も、オランダにかわって東洋貿易の覇権を握りつつあったイギリスの東インド会社が、広東を窓口として直接行なうようになってきました。しかし、製品としての茶は普及しても、その原料である茶の樹はいぜんとして謎に包まれたままでした。イギリス人が十七世紀まで飲んでいた緑茶と、十八世紀に普及した紅茶とが、同じ茶の樹からつくられたもので、その風味や色の違いは単に製法の違いによって生じるものだ、ということを知ったのは、ようやく十九世紀になってからです。

ますます増える茶の需要を満たすため、植民地であるインドへ茶の樹を持ちだし、ここで茶を生産しようと考えたイギリスは、当時東アジアやラテンアメリカなど新世界の各地で有用植物の採集を始めていたプラントハンターと呼ばれる博物学者（植物学者）の一人であるロバート・フォーチュンに茶樹の持ち出しを依頼しました。それまで中国は、国内での外国人の行動に大幅な制限を加えており、もちろん植物の採集や持ち出しもほとんどできない状態でした。しかし一八四〇年におこったアヘン戦争と、その結果むすばれた南京条約によって、プラントハンターの活動範囲は大きく広がりました。茶の樹の持ち出しに対しても、それまで中国人は、外国人に茶の樹の種子を渡す前に、それを蒸して発芽力を弱めてから渡すなど、いろいろな方法で抵抗していたようですが、プラントハンターが直接内地に入り込めるようになったため、もはや茶樹の栽培方法や茶の製法を秘密にしておくことはできなくなってきました。

ロバート・フォーチュンは後に日本にもやってきて、秋明菊（ジャパニーズ・アネモネという英名で知られている）や高野槇をイギリスへ持ち帰り、また「江戸と北京」という幕末日本の風俗の見聞録を残したことで知られていますが、それまでに四度中国へ渡って、茶の他にも谷空木、黄耨、躑躅、石楠花、菊など当時のイギリスではほとんど知られていなかった貴重な園芸植物を持ち帰っています。もっとも茶に関していえば、その後インドの高地アッサムで発見された茶の樹の変種（アッサム種）がインドや、それまでコーヒーのプランテーションが中心だったセイロン島で大規模に栽培されるようになり、フォーチュンの持ち帰った茶の樹そのものはほとんど散逸してしまいましたが、茶樹についての知識や製法など、フォーチュンの伝えた知識が、イギリスの茶産業に大きな功績を残したことは間違いありません。

ともかく、十九世紀以降、プラントハンターらの活躍によって、イギリスは植民地での茶の生産に成功し、国民のあらゆる階層に茶がいき渡るようになっていったのです。

## 茶樹の王

日本で栽培されている茶の樹は、高さがせいぜい一メートル前後で、これは中国で栽培されているものと同じ種です。一方、十九世紀にインドの高地で発見されたアッサム種ははるかに大きく、中には十五メートルにもなるものがあるそうです。今日では、茶の原産地は中国の雲南省であろうといわれていますが、ここには茶樹王と呼ばれる大茶樹がいくつも残っているそうです。

景洪の西、ビルマ国境から百キロと隔たらぬ南糯山の山中に、目指す茶樹王がある。

———中略———

茶樹王のあたりに近づくと、あちこちに茶の大木があらわれる。坂を下って視界が開けると、そこにゆったりと枝を広げた茶樹王があった。樹高そのものはさしたることはないが、枝の

張ったところが優に十メートルほどあろう。幹は大きく割れ、いかにも古木である。近くに設置された説明のプレートには、八百年前の茶園の残りであるという。つまり、茶樹王も、その周辺の茶の大木も、茶の原生林ではなくて、人工的に栽培された茶樹だったのである。

（「茶の湯の歴史」熊倉功夫著 朝日選書）

茶は単に東洋から西洋へ伝わったのではなく、最初はむしろ西から東へと伝わり、そこから海を渡ってオランダ、イギリスさらにアメリカへと広がっていったのです。現在ではその産地も中国、日本、インド、スリランカからジャワやアフリカのケニアにまで広がってきています。

## 幻の喫茶園

さて、再び舞台をイギリスへ戻すと、上流階級の嗜みから市民階級の社交の場へ、さらに家庭の中へと広がっていった茶は、コーヒー・ハウス全盛期の十七世紀とアフタヌーンティーの習慣が根づく十九世紀の間に、イングリッシュ・ガーデンとの華やかな出会いをなしてきていました。

喫茶園。というと公園の中に興行物や茶店があつて、音楽も聞ければ、ぶらぶら歩きも出来る。先づ浅草の奥山に似て今少し万事上品なものと思われる。是れは重に当時の上流社会の人達が行く所である。中に最も有名なのが二つある。ヴォークスホールとラネラーである。前者は当時の文学書に断えず引合に出て、大分規模の大きな物の様に思われる。是れは一九世紀の始めに取り払われた。私が洋行した時之を見たいと思つて居つたが、ある時ヴォークスホールと云ふ所を通つて見ると、極めて汚ない街で公園の様なものは毫も見当たらなかつた。

と書いているのは夏目漱石で、これは春山行夫の「紅茶の文化史」（平凡社刊）からの孫引きですが、ティー・ガーデン（喫茶園）がコーヒー・ハウスの後を受け継ぎ、市民に茶を提供する場として十八世紀には最大の繁栄を示しながらも、漱石の訪英した二十世紀初頭には跡形もなかつたことがよくわかります。

ヴォークスホールでは一千個以上のランプを灯した遊歩道、音楽やその他の余興、夕食、花火が呼び物でした。一方ライバルであつたチェルシーのラネラー・ガーデンでは、ロータundaと呼ばれる円形劇場の中でのオーケストラや仮装舞踏会が有名でした。

これらティー・ガーデンはいずれもイングリッシュ・ガーデンの正史には登場してきません。廃墟、拱門、彫刻、滝、音楽堂、支那式のパヴィリオン、ゴシック様式のオーケストラ席など、いかにも絵画的なイギリス人の趣味を凝縮した意匠を凝らしたこれらのガーデンは、「貴族たちの風景庭園の世俗化したもの」（高山宏著「庭の綺想学」ありな書房）という性格をもっていました。漱石が奇しくも浅草の奥山歓楽街と比較したように、庭もまた、貴族の手から奪いとられ、個人の庭へと収斂してゆく運命にありました。そしてティー・ガーデンは、アフタヌーンティーが家庭の時間を満たすようになる前夜の華々しい時間をイングリッシュ・ガーデンとともに過ごした、はかなく幸福な空間であつたのです。